

# 真生

第四卷 第九號

□如何なる場合にもすべてを善意に解しうる人は實に幸福な人であり、又偉大なる人である。

□而て之は自分に興へられたる一切の事業に對して其の時所位を問はず、悉く之を善意に解し得るやうに、其の周圍を善化せよと云ふ意味である。

□此の意味の自覺が私共の心の奥に輝いて居るならば一切のことが皆喜びと望みと力の中に永遠の生命と無限の向上とが味はれることであらう。

□而もかくてこそ一切が皆自分のものとして融化せられ、自他不二の妙相として一切が楽しく又力強く眞實の意義をなすのである。

□斯くて一旦の失敗も再び之を繰り返さぬ爲めの尊い經驗となり恩寵となる。

□而も其の間失敗については又失敗そのものとしての他に代ゆべからざる尊い經驗も興へられてゐるのであつて、そこには何等の失敗もないのである。

□否、時によれば之等の失敗も見やうによつては再び之を繰返さぬ爲めの深き反省となるのみならず、それが反つて多くの深き活動の中心源泉とさへなることがないとも限らぬ。

□乍然凡そ世間の人々に果して之等の修養がどれだけの力となつて多くの人々に味い得られてゐるのであらう。

□されど友よ、一切は善意の世界ではないか、一切は如來の慈光の中にある。（念）

## 目次

◆新宗教の出現に就て	土屋 觀道
◆既成宗教の反省	土屋 觀道
◆宗教思想と	土屋 觀道
◆社會主義問題	土屋 觀道
◆畑に落ちた汗	後藤 野良
◆唐澤所感	鈴木 まさ
◆唐澤別時三昧會の集り	

□人生の根本要求を何であるかと反省すれば結局は死にたくないとよくなりたいたいの二に過ぎぬ。而して前者は不死の要求であり、生命の問題であり、後者は向上の生活であり、價値の問題である。

□而も此の兩者を一として生きやうとするものが人生であり、宗教である。

□然に世人はともすれば此の二つの根本要求が自己の本心に潜在してゐることに氣付かずして、反つて此の要求に反するやうな行動をさへとる事が甚だ多い。

□乍然これは要するに未だ眞實の自覺が吾人に開けない爲めに外ならず、目前に誤られたる吾人の行動に過ぎない。

□昔は自己の生命を維持し、自己の向上を意味する人類の生活も時變り星移つては反つてその本心を妨げるものも少くない。

□然も吾人は此の理を悟らずして其の過程に止り進むべきに進まずして、反つて自己と社會とを誤まつてゐるのである。

□此の點について私たちは今少しく人類の生活を反省すべきではないか。

□それは自分一人のこと許りではない、自分の内の家族生活に於て、若くは町村發展の生活に於て、或は社會國家の向上進歩の上に於て、私共のとるべき人類生活の反省が必要である。

□而てそこには公私一如の自覺の上に、全一的生活發展の宗教的一大革命を必要とするのである。(念)

## 新宗教の出現に就て

土 屋 觀 道

今日の宗教は果して如何にあるべきか、私の信ずる所を以てすれば、茲に新たなる一宗教が出現して今日の一切諸宗の中心たり、生命たる人類の生活に即したる眞實の宗教が興るべきでないかと思ふ。而して今日の既成宗教は人類の向上發達と共に遂には之に歸一すべきものではないかと思ふ。

而して其の順序としては、先づ一般普遍の眞理として今日の宗教學、及び宗教心理學等の發達と共に萬人の歸一すべき宗教心理の研究となり、之等に歸一すべく、宗教道德並に宗教生活の改善として今日の既成宗教に一大變革が來なければならぬ。而て一時にか將た漸次にか茲に宗教の一大革命が來るのである。而て其の初めは先づ此の宗教學的若しくは宗教哲學的見地を中心として、各宗の祖師の教義を之に近づく可く生かさうとすると共に、今日の既成宗教は祖師に歸れと叫ぶに至る。而も其の實は決してすべてを祖師に歸すものではなく、此の祖師の中に今日の人類の生活に最も適すべき言葉や生活の或るものを發見して、それに歸れと叫ぶに過ぎない。して見ると之等の言葉や生活形式は要するに其の實は祖師に歸るのではなくして、祖師の言葉や生活の中に現代人の要求して止まない思想と形式とを發見してそれに生きよと云つてゐるに過ぎないとも云へる。従つてさうなれば今日の時代要求が愈々發展して一つの根本要求にまで統一せられ、それと共に既成宗教も亦等しく此の根本要求を最もよく現はしてゐる。

る所のものの方へ解釋せられて來るのである。而て遂に此の要求が各宗の一大生命となり各宗共通の中心勢力と成つて來る。さうすると反て時代要求こそ既成宗教の根本生命であつて、之に應ずることのできない宗教は時代の要求を充し得ないと云ふことによつて、いつかは自然に今日の社會から亡びて終ふことになる。而もかゝる事状こそ己に今日の宗教が今日のまゝでは立ち行かないところから、祖師に反へれとしきりに叫ばれる所以である。

然に之等の大勢は更に祖師だけに止まることを許さずして、それよりも更らに大なる各宗の本源にまで歸らねばやまなくなる。それは何かといへば今までは祖師に歸れと云つて、各宗各々其の祖師に歸つて其の中に各宗の特長をとり、又其中に自分の宗教的生活の満足を充たすことにとめたのであつたけれども、時代の要求は更にそれのみで満足することを許さずして佛教に於ては更に祖師よりも大なる祖師の祖師たる教主釋尊にまで研究の一步を進めて來る。

之が所謂今日の元始佛教としての印度佛教の研究となり、更に根本佛教をして釋尊そのものの宗教體驗の研究とまでなつて來た所以である。然に此の道理を知らずして、今日の既成宗教が今尙我祖尊の偏見に墮して此の時代の要求を捕へずして、各自に我田引水をなすならばそれは今尙封建時代の遺風に捕はれてゐるのであつて、共に時代の宗教でない。

乍然かゝる現代の風向は管に佛教各宗の上に現はれてゐるばかりでなく、己に基督教の各派の上にも現はれてゐる。加之、更に此の大勢に一步を進めたものは之等の佛教若は基督教が果して吾人の宗教たりうるものであるかどうかと云ふ研究であり、それが吾人の宗教でありうる限り、之も亦時代思想の要

求を充たしうるものでなくてはならぬとする。されば佛教と基督教との二つに於て、たとい其の形式に於ては或は全く相反する形のものがあるとしても、更らにそれよりも大なる一層高き宗教の原理が二者の間に發見せれつゝあることである。否少くともさうした意味での宗教研究が人類の宗教學的知識の要求として現はれて來たことも確かである。而て之等の内容が充分に充たされた所の宗教にして初めて之を價値の宗教として人も許し、又我も許すに至るのである。

さて、かうなつて來ると、今後の宗教は必しも佛教とか、或は基督教とか限られたる既成宗教の名まへでなくとも、むしろかゝる宗教の原理を充分に具備してゐるものでさへあるならば如何なる名まへでもよいと云ふことになる。従つて眞の宗教は本來佛教とか基督教とかいふ所の名前そのものではなくして、かゝる宗教の原理を充分に具へたものであらねばならぬ。而もかゝる眞理を充分に具備してゐるならば其の宗の名前は何であつてもよいと云ふことになる。

而もかゝる宗教的觀念は獨り私共だけの考へでなく、少しく宗教の本質に向つて哲學的考察をめぐらしうる今日の人々には己に既定の事實である。

然に今日の大勢から見ると、釋迦といひ基督といひ之を完全無缺なる佛神として見るべきであらうかよし一步を譲つて、之等を完全なる神佛、そのものゝ此の土に於ける出現なりとなるも、其の佛とは何であるか、神とは何であるかといふことを知らずして、どうして完全と云ふ神を知ることかできやう。

茲に於て、今後の宗教は從來の如き既成宗教の一派に個定することなくして、古來の既成宗教の中に内在する宗教の生命そのものに直參するの時代となり、一切の宗教を其の時、其の時代相應の宗教とし

て之を是認すると共に更に自分の眞に満足すべき眞實の宗教を是等の中から發見して、自己の信じうべき宗教の成立を自己の心の上に創建して行くことになる。否、己に過去の宗教に於ても其の中に屬する信者そのものの信仰内容に立入つて之を嚴密に觀察し來たならば吾人は自ら知らずして此の時代思想の要求を先たすべく、宗教を解釋するでないかと思ふ。従つてそこにたとい自分は永劫變らない確乎たる信念である云ふほどの信者ありとするも、之を入信の當時から今日までの信仰内容を嚴密に調査するならばそこには必ず幾分の信仰の内容の變遷を見ることであらう。言換へれば宗教の信仰及び其の内容は漸次に其の人の人格向上の程度に應じて、又應分に向上し發展して變化して行くものであるとも云へる。而もかゝる意味に於て、今日の宗教は今暫く人類各自の機根の相違と社會組織の變遷につれて、或は一致し、或は一致せない色々の宗教相を自由に顯現して行くことであらう。而も一切が宇宙の眞理を離れて存在しない限り、之等の宗教もやがていつかは、宇宙唯一の最高原理たる眞實の宗教に自ら歸して行かねばならぬ。而てそれが最後に來るべき眞の宗教であり、今後私共の生きやうとする宗教である。されば、友よ、私共の今後とるべき宗教はかゝる遠大なる理想のもとに、我等の生くべき眞實の宗教を基督教の上にも、佛教の上にも、否一切の宗教の上にも發見して、今日の宗教を改造して行かねばならぬまいではないか。

## 既成宗教の反省

一つの宗教成立が如何に時代の要求に相應じて現はれて來たものであるかを心に置いて我國佛教の思想變遷を見るならば恐らくは思い半に過ぎるものがある。今誠に各宗成立並に其の宗の盛衰興敗を見るに、初めて佛教が我國に入つた當時には未だ佛教の何ものたるかも充分に知られないのであつたが、朝鮮の文化を通して佛教の新しい生命が上流階級の人々に傳つた。其後聖德太子の如き大乘の師も出でられて國民の思想にも可なりの變化を與へたが、主として政教の交渉となり、一面には三論法相の盛大はやかて僧侶の横暴となり、南都佛教の一大墮落を來たした。之が奈良朝の末路である。然に此の弊害に堪えずして、都を平安に移されたのが所謂桓武天皇である。而てこの政變と共にこゝに新しき民心に應じて現はれたのが天臺眞言の二宗教と云ふべきである。然に此要求は一面には支那密教の新らしき影響と一面には我國々民の幼稚なる宗教心と相一致して、密教事相の極盛となり、之に伴ふ現世利益の祚禱佛教が一時に盛大を極むるに至つたのである。然に平安の末期政治の墮落、民心の敗退は地方豪族の出沒となり、僧侶の横暴となり、僧兵等の出現となり、時代の要求は源平の戦いを經て頼朝の天下となる頃に至つて一層之等の既成宗教を忌み嫌ふの傾向とさへなつたのである。而も此の時に當り此の時代の要求に應じて現はれて來たのが法然親鸞、榮西道元、日蓮等の偉人であつた。其の説く所自ら又時代の要求の民心に相應して來たのである。例へば此の時代に於ける自力解脱の要求に堪えない、源平の戦亂並に鎌倉時代の民間要求としては民心の救いを他力教に求むるに至り、又武士的氣性の社會階級の人々には即ち禪的氣風の禪宗が興つて來た。其の他日蓮宗の新しい問題の如き、之を國民思想の變遷と社會生活の事狀より研究批較して來るならば同じ法華經中心のものであるが四百年以前の天台宗の思想と自ら異なるものゝあることは實に了々として之を知ることが出来るのである。即ち日蓮の宗教は傳

教の自力的思索觀法中心の宗教に反して、他力的仰信稱題目の宗教に變つたことは鎌倉時代の民心に即應したものである。殊に天台眞言禪念佛等の既成宗教に於て時代の要求に應せぬ諸點を發見した日蓮が之を破しやうとしたことは確に吾人青年の心を動かす。

乍然日蓮逝いて六百年、其後新しき宗教も全々起らなかつたのではないけれども之といふ新しき宗教起らず、たまに起つたとしてもそれは以前の宗教と大同小異に過ぎなかつた。それは主として時代の要求がとにかく之等の既成宗教によつて満たされる事ができたからである。従つて其の後社會の組織、社會生活の形式が徳川の封建政策によつて一定したるが爲めに之に住した社會生活も別して新たなる宗教を要求せずすんだのであつた。

乍然時代の要求は暫くも止まらず今や時代は更に進展して明治維新の革政となり、茲に封建の時代は過ぎて資本主義的時代となつた、而も此の時殆んど凡ての既成宗教は之等の時代に入れられなくなつて來たのである。而も時代は更にそれより六十年を過ぎ去つて今や社會主義的思想要求は之等の資本主義的思想要求に相反しやうとして來たのである。此の時に當つて己に既成宗教が其の成立年代を去ること少くとも已に六七百年の今日に於て、今尙そのまゝの思移形式を以つて今日の時代要求に應じやうとすることは寧ろ不可能のことと云ふべきではないか。

之を以て之を見るに今日の既成宗教が今日の時代要求に相應せぬと云ふことは寧ろ當然のことでもあるが、之等は何如にすべきであるか。第一に生活の思想と形式に於て、過去の既成宗教の教ゆる所が、現代の要求と果して一致し得るであらうか。或は科學と宗教に於て或は道德と宗教に於て、果して矛盾なく一致しうるのであらうか、吾人は少くともこゝにいと深き既成宗教の反省を要するではないか。

(七、四)

## 宗教思想と社會主義問題 (一)

土 屋 觀 道

### 一、序 言

丁様、先達て私は或る人から私の思想信仰に對して世間の人々がともすれば非常な誤解をしてゐる人があることを聞きました。さうして中には私の説に對して、一種の社會主義者かの如く批難し又一種の危険思想家かの如くにさへ誤解してゐるものがあるさうです。乍然其時も私は考へました。一体そんな誤解をする人々は恐らくは未だ私の心を知らず、又未だ眞の社會主義といふものも知らない最も時代思想に關し低脳兒の考へである。さうして私は其らの人々に對して一々辨解する氣にもなれないで、むしろ組みするにも足らぬ人々として葬むつておきました。乍然其後そのことを又他の人々からも傳へ聞くに及びまして、之ではいかぬと考へました。それは外でもないけれどもよしそんな誤つた考へを以つて私の信仰なり思想

に就て色々と批難をするといふことは各その人の考へに應じて之を自己の立場からなすといふことは止むを得ない事として之を捨ておくとするも、その爲めに私の信仰なり思想に就て未だ少しも知らない人々に於ては、或は其誤つて聞いた話によつて更らに私に對する誤まりを造ることになるのではないか、若しさうなるとすれば、己に失れる爲めに折角私の説を聞いて見やうと思つてゐた人も之が爲めに失はれ、或はその爲めに反つて手を握るべき有爲の人々までも私の説に對して誤つた反對をするやうなことになるはしないか、又よし直接に私に會つて其の説を聞いていたとしても前おきにそんな誤つた考へが先入主となつてゐるが爲めに充分に之を聞き入れるといふ餘裕といふものがなくなるやうな傾向を生ずるものではあるまいか、若しさうとすれば、よし私其のも

のはたとい世間に誤解せられ、世に入れられないで、一生それらの人々に害せられるとしましても尙忍ぶことも出来ませうけれど、若し此の誤解さへないものならば初めから其の人々と手をとつて共に社會の向上にたづさはることが出来るものもないではあるまいにと思つた時、私は若しかゝる世人の誤解をして、眞に誤解ならしむることの方法がとることが出来るものならば、此の方法をとるといふことは決して私のとるべき道として誤まつたやり方ではないといふ風に考へて参りました。従つて其後私は主として宗教思想と社會主義問題に就て二三私の考へを述べてみたいといふ風になつて來たのであります。就ては私と共に道を求むるの人、並に私の信仰と思想に於て是等の思想關係に就て知り度いと思ふ方々は是非とも此の一文を御一讀を願ひたいと思ひまして、アナタ名宛に一般の讀者を兼ねて茲に其の考へを少しく述べさせていただきます。丁様それは私の性質として、思想上にも生活上にも一人として此の世に敵を持ちたくない私、否持つことの出来ない私と

しては之等の思想に對しても、私の考へによれば宇宙に二つの眞理はない、故にすべては此の一つの眞理に出で、又此の一つの眞理に歸すべきである。従つて色々異なる眞理があるやうに見えるのは、各々其の立場々々によつて其の見様を異にするところから其の説を異にして來るのでないかと思ひます故に若し其の兩者が眞に目ざめて宇宙唯一の原理に歸一して來るならば一切の人類のすべての思想も亦此の原理に歸一合同して來るのでないかと思ふものであります。従つて之等の問題も兩者共に語り共に論ずるといふことも要するに其の最後には此のすべての歸すべき最高の原理の一致し得べきものであると信ずることのできるからであります。

さて然らば宗教思想と社會主義問題とは如何なる關係にあるものでありませうか。世にはかうした考へ持たない人があるかも知れません。又中には初めから何等の關係もないものであるとさへしてゐる人があるかも知れません。乍然私共の立場として考へますれば己に私共が此世に生存して

ゐますかぎり、凡そ此の世のすべてに於て例へ塵一に於てさへ何等の關係が無いとはいへないやうに、まして今日の世間に多く云々せられる社會主義なるものと宗教思想なるものとが何等寸毫の關係もないといふことは果して正しい云ひ方でありませうか。否若し何等の關係もないものであるとしましてもやつぱり無いものはない丈に兩者の關係を明にしておかなければならないものではないかとも思ふのであります。まして私の信仰及其の宗教思想に於てどうしても社會生活と離れることのできない以上、さうして殊に私の信仰並に思想に對して一種の社會主義や過激思想であるかの如き誤解者ある限り、之はさうしても一應明にしておかねばならぬものではないかと思ふのであります。

それに就て先づ此の兩者の關係を明かにするには此の兩者が各々如何なるものであるかを明かにして、さうして此の二者を比較研究した上に其の各々の得失異同を明かにして、さうして之に對する私の立場を一々明にするといふことが私が此の

問題に對してとる可き最後の方法でないかと思ふのであります。

乍然かくの如き問題は實に私に於ては一朝一夕にして之を述べつくすことはできない問題であり且つ又讀者各位に於ても中々容易なことでないかと思はれます。何となれば單に宗教思想の問題にしましても、宗教とは如何なるものか、又宗教信仰と宗教思想との關係は如何なるものか、又宗教思想と宗教生活との關係は如何なるものか、而も之等の問題にしましても亦各々其の思想の流れを異にし、其信仰の内容を別にするもののある以上之等の一切を悉く歸一統攝して而も之と社會主義問題との關係に及ぶといふことは甚だ容易ならぬことであります。又一方社會主義問題にしましても、少くとも今日の處、社會主義とは如何なるものであるか、さうして同じく社會主義と申しましても、色々の種類がありまして、其のいづれが眞に私共のとるべく、又はとるべからざるものであるか之等は更らにそのものに就て一々考究せらるべきものでありまして、單にそれ丈けのことにし

まして甚だ容易な事ではありません。況んや社會主義といふものは過激な思想を持つた危険思想の持主で一から十まで社會の進歩を害し、人生の幸福を悉く破壊するを以て其の主義としたものかのやうにさへ考へてゐる人々に對して其の誤まつた思想を一々に訂正し、さうして其の間に於ける宗教思想の眞實内容と此の社會主義思想問題との關係に論し至るといふことは之また一朝にしてできうることではありません。そこに又社會主義といふ名のもとに何んでもかでも社會主義でなくてはならないといふ風に考へてゐる人々に對し果して社會主義といふものは如何なる社會主義でもさういふ風に私共の共鳴してよいものであらうかどうか、さうして又、殊に社會主義者といはれる人々は多くの場合宗教の否定論者であるが、果して宗教といふものは社會主義者に反對せらるべきものであらうかどうか、是等の問題も私共は眞に一考を要すべきものではないかと思ふのであります。さうして又、私は思ふのです、所謂今日の宗教家若しくは教育者なるもの、或は今日の社會事業

家、若は爲政者當局に於て少しも社會主義の研究もせずして初めから悉く之に反對してよいものであらうか、少くとも人格ある人としては、先づ社會主義そのものが如何なる思想と主義方針の上に立てられてゐるものであるかを眞に理解して後ち之に對する眞の批判をなすべきでありませう。然に今日の多くの人々はともすれば未だ之等に對する充分の理解研究もなくして、輕々に之等思想に反對してゐるのではないかとさへ見える點もあります。若さやうなことが万一にもあるとするならば私共は之を以て眞に私共のとるべき道であるとするにはできない。若し萬一にもさうでないとするならば私共は之に對して自ら讚成するなり或は反對するなり、正々堂々として其の是非を天下の公衆と共に發表すべきではあるまいか、尤も之を社會政策の立場から考へて未だ社會の思想程度の幼稚な時代にはそれらの社會に於て如何なる思想も自由に之を論ずることを許すといふことはその思想の爲めに健全なる思想涵養の上に大に考慮を要すべきものであることは私共と其の政府當局

と共に大に考慮する所ではありませんけれども凡そ人類思想の一大潮流は單なる一爲政者の考によつて人工的なる思想の壓迫や之等主義者への迫害位を以て之を除去することのできるものではないかと思ふ。従つて私共の考へによれば或る程度まではもとより之等の方法を爲政者として構成することも止むなきことではあるけれども、之と同時に否之よりも更らに進んで、是等の思想を充分に研究し、分別して一々之等に對する思想信仰の是非を取捨して更らに之によつて之に類せられず反て之によつて一步進んで社會の發展に自由の向上を爲し得べく國民の思想を健全ならしめるといふことが更らに一層急務な問題ではないかと思ふものであります。従つて如何なる過激なる思想も亦如何なる危険思想と思はれる考へも一般國民の所謂思想は思想を以て戦はし、研究を以て任せらるべきものであつて、單なる武力や法律等の壓迫を以て社會思想の一大潮流をさへ切らうとするが如きは反つて時代進歩の運行を害することの甚しいことを思はねばならぬと考へるものであります。否

寧ろかゝる誤つた爲政者の考へこそ、眞に社會の危険分子であり、危険思想であるさへ考へられるものであります。(二三、八、一五、朝)

二、時代思潮と其の變遷

丁様、私は前述のやうな立場に於て私の考へを出来るだけ簡明に述べて見たいと存じますがそれに就て其の前程として先づこゝに考へねばならぬことは其の時代々々に於ける思想と其の思想の遷り變つて行く有様であります。之を簡短に云へば時代思潮と其の變遷とも題すべきであります。私は此のことに就て、凡そ時代思潮といふものはどうして現はれて來るものであらうか、さうして其の時代思潮といふものは其の時代々々によつて幾分づゝか其の色彩を異にしてゐるものであるが其の時代思潮なるものが如何なる色彩のもとに世界並に其の國々に於て時代史に現はれてゐるのであるが、さうして又其の思想なるものが如何なる流れのもとに變遷して行くものであり又行きつゝあるものであらうか、其の原因及結果に於て過去

及現在未來に於てどう云ふ風に流れて行くものであるかを考へさせられてゐるものであります。然に之等の變遷は主として人類生活の一形式の變遷と伴ふものでありまして、そこには一概に單なる一二人の原因によつてのみ之を論ずることは出来ませんけれども主として各人類が自己の社會的生活に於其地位の安定を得やうとする所に向つて其の最も力の強い方へ、都合のよいやうに思想の方も一般的に移つて行くやうであります。従つて人はどういふものか、各自の生存上、自己の安定を計らうとするものであります。さうして其の方へと向けて行くやうであります。さうして其の社會生活の組織も亦其の最も力の大なる方へと變遷して行くものでありまして、此の二者の關係は常に相助け助けて進展して止まないものやうであります。

乍然、社會の思想はかゝる形に於て變遷するものではありますけれども、其の間には此の變遷に對して生活上の不安を感じるものもありますのでそれ等の人々はむしろ之等の思想若は生活に對し

て多少の反對を試みるものがないではありません。さうして其の中には或は單なる習慣性のもものもありません。又中には全く其の人に於ては不安の生活に陥る人もあります。従つて之等の人々自己の生活の安全の爲めに或は感情の上から若は自身自身の安全の立場から、それらに都合のよい理由と主張を考へ出して之等の大勢に反抗して立つものも多々あるのであります。乍然一種の社會力とも申しませうか、其の時代一般の生活形式若くは社會組織とも申しませうか、其の時代に於ける人類の生活經濟の推移變遷はそれ等の反抗も辨明も聞き流しにして、ドンドンと流れ移つて行くかの感があるのであります。而て其の社會組織の變遷及び時代思想の流れなるものがある以前から有史時代となつて今日に至る世界史上の一大變遷は如何なる状態に變つて來たのでありませうか此のことを少しく實際世界史上に反省して見るならば誰れも一人として反對することのできない一つの史實を發見すると共に、之に伴ふ時代思想の變遷と又之に伴ふ現代人の思想の流れが那邊に進

んで行きつゝあるかも明に知らないのであります。然ばその社會組織の變遷と時代思潮の推移とは如何なるものでありませうか。之を歐洲史上に見ましても有史以前は暫く別つとして、多くの社會の組織に於て其の勢力の主權は一國の君主にあり、其の頃に其の國の君主若くは二三の特に權力の強い人々によつて支配され、多くの場合は等の人々の爲めの國であり人民であるかの如くにさへ考へられて、何事も主として是等の人々の爲めに自由にされた姿であつたのであります。尙其の頃には所謂封建時代と申しまして、即ち諸國には諸侯なるものがあり、その下に武士なるものがあつて、諸侯の爲めに生命を献げて仕へ、その代り諸侯からは應分の食祿を貰つて農工商の上に立つて權力をふるつたものでした。而も此の場合も諸侯が一番力を振つて、其配下に武士をかゝへ、武士は又一方諸侯に仕へて其の力を頼み一方には此の力と共に自分の腕力を農工商の上に自由に振つたものでした。従つて其の下に農工商は治められ一切の生命も財産も之等の權力のもとにのみ許された形

でありました。之を要するに主として其の政治的權力は之等の貴族若くは武力階級の上にあつたと云ふべきでありませう。然に中頃に至つて之等の權力が次第に衰退に傾いてまゐりまして、之に代はるものができて來たのであります。それは所謂一つの歴史が明かに示すやうに單なる封建的社會組織が崩壊して更らに一團の大國家が成立し、或は立憲君主國となり、或は立憲共和國と云ふものができて來たのであります。さうして君主も今までのやうな獨裁專政を爲すことができなくなり、此の間幾分の自己の權力の專政を許さず、その權力の範圍若は其の意志の力を律文の上に明示して國民との間に之を亂用しないことを誓ふやうになり、國民はそれだけ自分等の力の上に眞の自由と生活の保証とを得たのであります。加之、或る國の如きは更にそれ等の君主をも廢して全くその國体を國民の專有に歸し、其國民全体の自由意志によつて一國代表の大統領を選舉して、其の國と國民とが一体となつて統治し又統治せらるゝの形をなしたのもあります。之が所謂共和政体とい

はれるものであります。さうして、之を君主專政と立憲君主政治と立憲共和政治とも命名することができるのであります。此の間國民一般の自由と平等との權を獲得した點に於て之を比較するに其の社會生活の思想の上にも亦一大變化のあることを認められるのであります。之を更らに封建時代の社會及思想に比べて殆んど隔世の感があるのであります。

乍然、君主專政と云ひ或は立憲君主政治といひ、又殊に立憲共和政治といひましても、其の君主若くは共和の政治内容に於て一々之を比較いたしますならば之等の政体若は政治に於て其の思想並に其の政治内容に至りましては更らに民權の伸張民力發展の状態は各その國と時代によつて更らに多くの等差があるのを見るのであります。乍然主として、共和政体から、君主政体に變り、又立憲君主政治から非立憲的政治に變るといふことは殆んど今日の大勢に於て思想の上にも歴史の上にも見ることがないのであります。従つて國民の思想も、民力中心の政治政權の伸張に向つて進

みつゝあり、進むことを以つて當然のことであるとするの思潮であつて、之を否定して、武力政治に歸り、若しくは貴族政治や、君主專政にあまんずることを以つて時代の進歩であり、社會の進展であると思はるやうなことは少くとも今日の大勢ではありませぬ、従つてそんな思潮も又そんな史實も見あたらない有様であります。

然に今こゝに一つの不思議な社會現象が現はれて來たのであります。それは今日の社會は眞の自由と平等の世界でない、所謂眞に働いたものがそれに相應した利益の分配を受けずして、反て働かない方面の或る人々によつて其の利益が横ざりされてゐることでありませぬ。故に吾人は是等の社會をして徹底的に其の利益の一切を其の働いた人々に於てそれに相應した利益の分配を受けさせることができるやうな社會に改造せなければならぬ。それについては凡そ人たるものは平等の權を有するものであつて、生れ乍らにして、貴賤上下の區別を立てるべきものではない。例へば同國民であり乍ら甲は一生働かないでゐる他の一人の働いたも

ので自由に生活し、又自由に遊んでゐてよいが、乙は一生働かねばならぬ、そして甲のやうな人々の爲めに一生仕へて行かねばならぬ。又甲は甲の都合で乙の人の生命も勝手に自由にとることもでき、又勝手に命令的に其の人を使用することも出来るのであるが、之に反して乙は乙の都合で甲の生命を勝手にとることもでき、又乙の都合で甲の人を勝手に命令することもできぬといふやうなことが其の生れた家柄によつて差別せられるといふことは果して正しいことであらうか、それは自分達の大きい考へて見なければならぬ所でありませぬ。最も未だ働けない所の小供や病人や老人の如きものは互に助け助けて安態の地位に保護すべきは勿論でありませうが若しさうでない限り、各々働く事のできるものは各其の分に應じて其各人の地位相應に働くといふことは寧ろ人として當然のことではないか、さうして働さうるものが働かず遊んで喰つて行き、働く力のないやうな病人や小供までが反て其の力以上に働くことをよぎなくせられ、而も其の困苦の中に働いて

得たものがそれに相應して其の利益を與へられず反て働かないで遊んでゐるものが横から其の利益を分取るやうな仕打をしたり、或は大いに働いたかに見せかけて、其の利益の分配を平等にしないので反て働き以上に多く横取りをするといふことは果して人として正しい生活の仕方であらうかと考へるやうなものが現はれて來たのであります。而もかゝる考へが單なる道徳や哲學又は宗教家によつて言はれるのでなくして、寧ろ之等の生活の不行平等の上に置かれてあると信する人々によつて此の考へが發せられ、さして單に此の考へが發せられるばかりでなく、之等の人々によつて、之等の人々に利益を與へないと信せられたる社會及び其の社會の人々に對して、或は思想上より或は代議政治の範圍より、或は更らに過激な人々に於ては直に武力を以つて之と戦ひ、そこに彼等の理想とする所の社會組織を實現しやうとするの主義主張並に其の實行の團體が出來て來たのであります。

(大正十四、八、十六。御殿場大乗寺)

畑に落ちた汗

後藤野良

吾人は講壇に知るよりも、先づ草をぬくことだ

十五年後、學生になつた資産家の息子より、たゞ  
ひたすらに田を耕して蛙と共にあつた貧しき青年  
をなんで現代は讃歎しないのだ。猿の智慧者が價  
値であり、土足の人が無價値であり、嫌悪である  
のか。

すべての價値の轉倒！

山うばのラヂオがあくなき貪慾の歌を唱ひ  
アインシュタインの受買が高花を咲かせ  
マルクスの刃のこぼれたぎざぎざのメスが、光を  
放つ、而もこの三つが近頃の價値であり、最もよ  
くはやる醫者である、人々は恍惚として療治をう  
ける、  
明日、人々はどうしたらいいだらう！！

耳たばがでつかくなり、あまり腦ミンが腐りはみ  
出し、大きい奴はちよんぎられ、小さい奴はびら  
くつけたされる、

我々は氣をつけて知らねばならぬ、如何なるもの  
が眞の價値であるかを  
吾れに於いて

人格の聲、世界創造の叫び！ これ價値なり、  
作られたる笑ひ、媚びられたるえみ——自分是不  
快を催す、光明主義の人々の中にも見る  
——彌陀のこゝろをまちがへた——

小さきざんげ、あごの下までもとくかない涙  
この如き泣虫をつかみ殺せ  
汝の涙を汝の足裏にまでおとせ、そのうるほへる  
足もて明日の苦痛を意欲せよ  
眞の念佛は鞋草はく所にあり、わらじをはく歡喜  
より念佛は始まる、わらじとは地と肉とに即して

唐澤所感

鈴木まさ子

あゝ海拔三千尺

コ、静寂の靈境の地よ  
ひぐらし鳴き驚うたふ野水は滾々としてあふれ

人は熱騰の巻をわする

東より西より集ひし七十余人

眞劍と熱烈に而も眞面目に喜びと望みと力とに  
満ち充たされて黙々たり。

一人の尊き師は

天地の大道を説き

宇宙の眞理を語る

此の絶大無限の光明に

照らされた時

人は眞實の涙にむせぶ

悔恨の涙か、懺悔の涙か

歡喜の涙か、感謝の涙か

○其涙——こそは

念佛となる

朝たに夕べに念々刹々として祈りはやまず。

○満ち足りて外に願ひのなきまゝに  
只彌陀佛とみなよびまつる  
○み佛の限りしられぬみめぐみは

くめどもつきじ唐澤の水

○はる／＼とみ法の道をたづね來て

青葉の奥にはとゞきすきく

○み佛のめぐみの御手に召かれて

み法を學ぶ集ひ尊し

○年ごろの切なる願ひゆるされて

み法を學ぶ今日のうれしさ

○残しをきし吾子はいかにと思ふかな

み佛守りてましますものを

○み佛はおのが心の中にぞと

はじめて知るもみ佛の慈悲

○み佛の聖意をおのが心にて  
世のなりはひそをつとめ行かまし

宅價一部十錢 半年六十錢 一年一圓  
 振替口座東京四七二八八番 眞生社  
 東京市芝區芝公園第十四號地九番  
 編輯兼 土屋觀道  
 發行所 眞生社  
 東京市芝區芝公園第十四號地九番  
 印刷所 三井清次  
 東京市芝區三田四國町二番地三號  
 印刷所 玄々堂印刷所

